



令和6年度 沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

史跡

円覚寺跡

― 発掘調査と整備 ―

令和6(2024)年

10月16日(水)～11月17日(日)

図録



目次

ごあいさつ	1
1 史跡円覚寺跡の概要	2
2 円覚寺跡の発掘調査	6
3 円覚寺跡の整備	16
円覚寺・首里城関連年表.....	24

【凡例】

1. 本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展『史跡円覚寺跡 - 発掘調査と整備 -』(開催期間:令和6(2024)年10月16日～11月17日)の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾を得なくても、本図録を複製して利用できます。(ただし、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵資料を除く。)利用にあたっては出典を明記してください。

表紙写真 (下左)円覚寺 三門背面(鎌倉芳太郎撮影:沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

(下中)円覚寺跡 総門(復元前)

(下右)円覚寺跡 放生橋(移築後)

ごあいさつ

かつて首里城の北側に位置していた円覚寺は、第二尚氏の菩提寺として尚真王代の1494年に創建されました。琉球では最大規模の禅宗寺院であり、七堂伽藍を備えた境内の建造物群は、琉球建築の精華として1933（昭和8）年に旧国宝に指定されましたが、沖縄戦により焼失し、その指定も解除となりました。

戦後、琉球政府文化財保護委員会による首里城及びその周辺の戦災文化財の復元整備が進められる中、円覚寺についても1968（昭和43）年に総門が復元されます。その後、1997（平成9）年度から2016（平成28）年度にかけて沖縄県教育委員会や沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が行われ、敷地全面にわたり良好な状態で遺構が確認されました。

このような調査成果をもとに、2002（平成14）年度以降、円覚寺跡を囲う石牆の復元が継続して行われ、続いて2014（平成26）年度から、木造瓦葺きの建造物となる三門の復元工事を実施しています。

これまでの発掘調査によって、円覚寺建立に先立ち行われた土地造成の痕跡や各種建物の遺構が検出され、同時に寺院遺跡を特徴づける様々な遺物も見つかっています。今回の企画展では、これらの発掘調査成果とともに、現在進行中の三門の復元整備についても紹介します。

本展を通して、かつて首里の地に存在した琉球を代表する寺院、円覚寺に思いをはせるとともに、郷土の歴史や埋蔵文化財への理解がより一層深まることとなれば幸いです。

令和6年10月16日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 池田 潤

1 史跡円覚寺跡の概要

(1) 円覚寺の歴史

円覚寺は、那覇市首里当蔵町1丁目、2丁目に所在し、1492（明応1）年から約3年の歳月をかけて建立された臨済宗の寺院です。尚円王の御霊を祀るために建立された第二尚氏の菩提寺です。沖縄が本土復帰した1972（昭和47）年5月15日に文化財保護法によって国の史跡円覚寺跡として指定されています。

1429（永享1）年に三山を統一した尚巴志によって首里を中心に統一政権が誕生し、後の尚真王が即位すると、国内における内政改革並びに首里・那覇周辺の整備が積極的に行われるようになります。

他方で、14世紀後半頃から日本本土の禅宗僧が明や朝鮮との通交を仲介するようになり、15世紀前半から中頃にかけて禅宗寺院の建立が相次ぎました。中継貿易が琉球国にとって大きな王府の財源となっていたために、それを円滑に進めていくための禅宗僧の確保、それに伴う寺院建立が進められました。15世紀後半に禅宗僧を外交担当とする対日貿易の体制も整備されていくと、首里王府による仏教政策も質的充実が図られると共に、その禅宗僧の受け皿として天界寺や天王寺のような大規模寺院が造営され、更なる海外交易の拡充が行われました。このような状況下で円覚寺は約3年という大事業の末に1494（明応3）年に七堂伽藍を完備した禅宗寺院として完成しました。

『琉球国由来記』（元禄16：1703年）には、「広範囲に地ならしを行い、瓦を造って堂宇に葺いた」とする円覚寺伽藍群に関する記載があり、建立に際しては、首里城正殿が瓦葺きとなる1670（寛文10）年に先立ち瓦葺きが行われ、最新の建築技術を駆使して建造されたことがわかります。

初代住持職は京都の南禅寺の芥隠承琥禅師を開山住持、山号を「天徳山」とし、沖繩戦に至るまで沖繩県内で最大規模を有する寺院として約450年間続いていくこととなります。『球陽』には仏殿や荒神堂、寢室、方丈、法堂、三門、両廊及び僧坊、厨房、浴室が創建当初の建物として記載され、創建当年（1494年）には



三門地区 遺構検出状況（南東から）

御照堂が建てられ、それを第二尚氏の宗廟とし、以降歴代王の位牌は円覚寺に祀られるようになります。さらに1496（明応6）年に鐘楼、1498（明応7）年に放生池及び放生橋が築造されます。

創建当初の様子に関しては『使琉球録』（天文3：1534年）に記載されています。そこには「①正殿（仏殿）の規模は5間、②正殿内部は仏像が1座安置され、左右には経典が数千巻納められている。③仏殿天井には板が張られそこには五彩の絵が描かれ、床には筵が敷かれている。④仏殿外には小さい池を掘り、怪石を飾っている」とあります。それらは「廣大にして壯麗であり、王宮に垂ぐ」と明正使陳侃が報告しています。この尚真王による円覚寺の整備を称えて1509（永正6）年建立の「百浦添之欄干之銘文」の第一条には「仏を信じて像を造り、寺を建てて金を布き、仏閣、僧坊、経殿、鐘楼、磬を連ね棟を接し、輪奐美を兼む」と王徳のひとつとして記されています。なお、この円覚寺創建以降も玉陵（文亀1：1501年）、円鑑池（文亀2：1502年）、園比屋武御嶽石門（永正16：1519年）の造営、真珠道の整備（大永2：1522年）、首里城南側外郭拡張（天文15：1546年）と首里城周辺の整備が継続的に行われます。

16世紀になると、琉球国による東アジア交易の衰退と共に国内では廃される寺院もみられる中、円覚寺は1571（元亀2）年に御照堂が加建、1588（天正16）年には方丈、大殿、三門等、1596（慶長1）年には法堂（仏殿）が修復されています。これらのことにより、円覚寺は国王の菩提寺として王府の厚い庇護下にあったことがわかります。また、首里における士族子弟の教育施設としても利用されていたことから、王府経営の教育施設としても機能していました。

薩摩侵入時には焼失を免れ、近世に入っても王府から60石、1695（元禄8）年には100石に加増の知行が与えられています。これは琉球国内にある寺院の中では最も石高が高く、円覚寺創建以来から王府内で最も格式ある寺院として位置付けられていることとなります。

このような王府の庇護もあり、17世紀以降も建物の修復が繰り返される一方で、1721（享保6）年に大殿（戦前まであった龍淵殿に相当）が失火により焼失してしまいます。当時の住持覚翁が責任を問われて八重山へ流刑となるものの、同年に大殿（龍淵殿）が再建されます。その際、歴代国王の位牌配置を正式に変更し、仏像の配置換え等、堂内部の改変を行っています。以降も1728（享保13）年に獅子窟、御照堂が小堂に改築、1744（延享1）年には鐘楼や亭寮、照堂寮といった建物の移築や修復が行われる等、近世を通して永く王府の厚い庇護下にあったことが伺えます。

近代に入ると、琉球処分から5年後の1884（明治17）年に王府管轄から尚氏の私寺に移管されます。しかしながら、尚氏に関わる王府の儀礼そのものは沖縄戦直前まで執り行われていました。1933（昭和8）年には総門や放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が旧国宝に指定されますが、1945（昭和20）年の沖縄戦によって全ての建物が焼失しました。



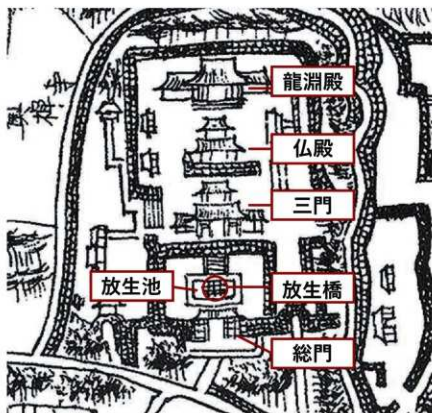
円覚寺 三門背面（鎌倉芳太郎撮影：沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）



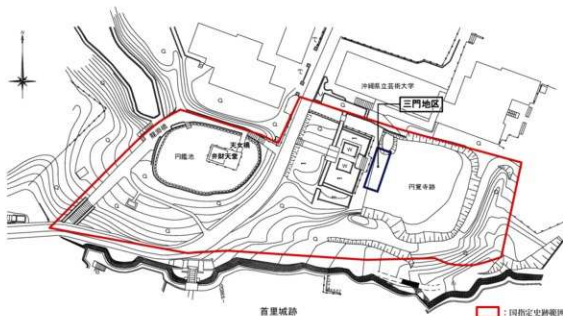
三門地区 遺構検出状況（南東から）

(2) 伽藍配置について

円覚寺の中央にある門は総門で、総門をくぐると中には放生池があり、放生橋が架かっています。橋の先には三門が建ち、仏殿、龍淵殿と直線上でつながっています。このような総門、放生池、放生橋、三門、仏殿、龍淵殿（方丈）が直線上に並んだ配置は、禅宗寺院にみられる伽藍配置を倣ったものとされます。



首里古地図（沖縄県立図書館所蔵（一部加筆））



円覚寺跡の史跡区域

2 円覚寺跡の発掘調査

(1) 調査に至る経緯

第二尚氏の菩提寺であった円覚寺。かつて存在した様々な建造物は、戦災により境内を囲った石牆の一部を残して焼失してしまいました。戦後は跡地に琉球大学関連施設も建設されました。その後、当時の琉球政府文化財保護委員会が中心となり、首里城一帯の戦災文化財の修復や復元が進められていく中で、円覚寺跡についても、1968（昭和43）年には総門の復元、放生池及び放生橋の修復など周辺が整備され、1955年（昭和30）年には琉球政府史跡に指定されました。さらには、沖縄が本土復帰した1972（昭和47）年に国指定史跡となります。

琉球大学の移転が完了した1982（昭和57）年以降、首里城をはじめとする周辺の文化遺産の復元整備が進むと、円覚寺跡についても主要部分の整備を望む機運が高まりをみせます。そのような情勢の中、沖縄県教育委員会は、遺構の保存状況を確認することを目的として、1997（平成9）年から2001（平成13）年までの5か年間にわたり、国からの補助を受けて発掘調査を実施しました。

調査の結果、円覚寺の境内を囲う石牆、建物の土台となる基壇遺構や礎石、石畳、石列、溝、埋甕跡などの様々な遺構が検出され、遺跡の全域において遺構の保存状況を把握できました。中でも獅子窟、仏殿、龍淵殿、鐘楼、三門においては、建築家の田辺泰による『琉球建築』に記載された円覚寺平面図と、位置関係や建物規模などがほぼ一致し、さらに古写真に残る遺構と整合することがわかりました。また、これらの検出された遺構のうち、比較的残存状況が良好であった石牆については復元が可能となり、調査が終了した翌年の2002（平成14）年度から10か年計画で復元整備がスタートしました。その後、2006（平成18）年度からは整備と並行する形で、復元整備に必要な基礎資料を得るための発掘調査を右掖門、三門、南側の石牆箇所で行いました。

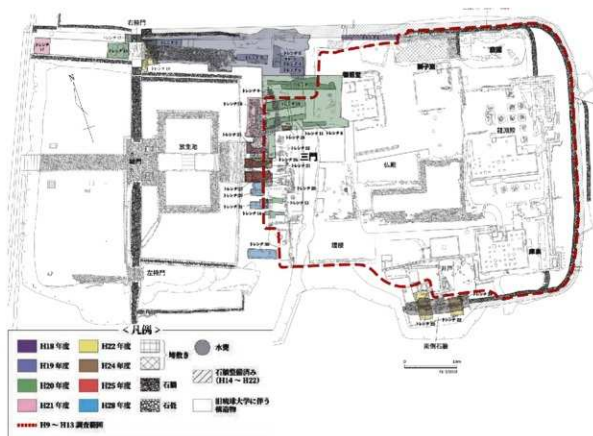
そして2014（平成26）年度からは、2004（平成16）年度に県教育委員会が作成した『円覚寺跡基本整備計画策定報告書』に基づいて「円覚寺跡三門基本設計業務」



三門基壇 礎石と根固め石（西から）

に着手し、三門の復元に向けた整備事業に移りました。2018（平成 28）年度に三門地区での追加調査を実施して以降、三門の整備事業が着々と進められ現在に至ります。

次に、現在進められる当該整備事業に鑑み、三門の発掘調査の成果を紹介します。



円覚寺跡 遺構全体図



2 円覚寺跡の発掘調査



円覚寺跡の発掘調査の様子（平成 13 年度）

(2) 三門の発掘調査

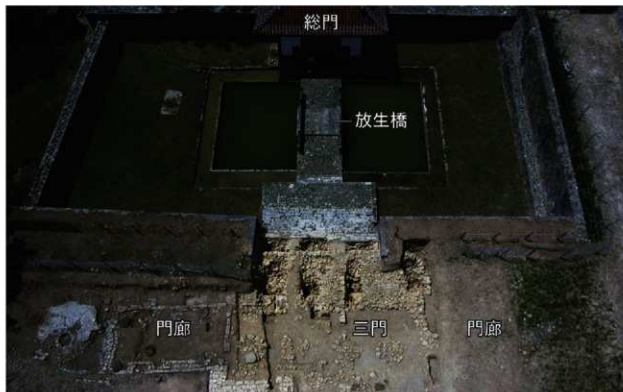
円覚寺の三門は1492年に創建され、1588年、1652年、1697年に改修を受けていることが分かっています。建物規模は桁行三間、梁間二間、柱は総丸柱の二層建築、下層の床面は塼敷きで、左右門廊が付属しており、柱基礎は柱を受ける断面半円の礎盤が設置されていた状況が古写真からうかがえます。発掘調査の結果、三門基壇の石列や石積み、柱基礎の根固め石など、三門基壇に関連する遺構の他、石畳などの左右門廊の遺構、土留めの石積みなどの土地造成に伴う遺構が確認されました。

三門基壇

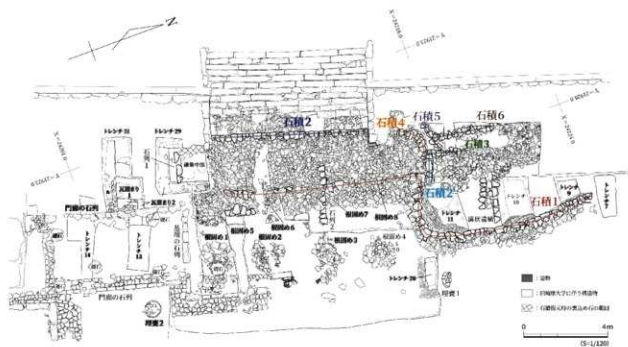
三門基壇に関する石列や石積み、根固め石の検出により、基壇の位置や平面規模に関する基礎資料が得られました。基壇を縁取る石列には塼をはめ込むことができる段が形成されています。また、複数検出された根固め石は、古写真にみえる柱の配置と一致することがわかりました。このうち礎石1基については、原位置を保った状況で検出されています。

三門の左右門廊

三門に付属する左右の門廊のうち、南側の門廊に伴う石畳や石列、埋壘跡などが検出されました。北側については大きく攪乱を受けており、門廊遺構は見つかりませんが、暗渠と考えられる溝状遺構や埋壘跡が検出されました。この埋壘跡については、防火用の水甕として、かつて三門基壇の南東及び北東隅に設置されていたものが、それぞれ原位置で検出されています。これら2基の埋壘の位置と南側の門廊遺構を手掛かりに、北側の門廊跡についても左右対称であることが推定可能となりました。



三門地区遺構検出状況（東から）



三門地区遺構平面図

円覚寺跡

2 円覚寺跡の発掘調査



遺構検出状況（東から）

土地の造成

瓦葺きで重層構造をもつ三門は、地面に対して大きな比重がかかることから、三門を支えるための地盤が必要となります。そのような強固な地盤を形成した往時の造成事業の様相も調査によって明らかになりました。

三門地区で確認された造成土は、クチャ（泥岩）塊を多く含む土層と粘質の土層が交互に堆積していること、また、東側から西側へ傾斜して堆積しながら地表近くでは徐々に水平となるような調整を行っている状況が確認されました。さらに、出土遺物が少ないという状況から、これらの造成土は時間をかけて堆積したものではなく、短時間のうちに大量の土砂を投入したことが考えられます。なお、造成土からは、15世紀後半～16世紀代に位置づけられる陶磁器類が出土していることから、円覚寺創建時の造成土と考えられます。

円覚寺跡

2 円覚寺跡の発掘調査



石積1と造成土（トレンチ10内・北から）



三門南側門廊跡（東から）



門廊内造成土（トレンチ13内・北から）

地中に築かれた石積み

造成土を掘り下げると、地中から石積みが7基検出されました（石積1～7）。その中でも最も深い箇所で約3m高にも及ぶ石積1は相方積みで、三門基壇部から南北方向へS字状に延びます。このような特徴をもつ石積1は、傾斜地に投入された大量の造成土から発生する東側からの大きな土圧を吸収するために、地中に築いた土留めの石積みと考えられます。特徴的なS字状の形状は、効果的に土圧を吸収するための工夫なのかもしれません。また、石積1を補強するような石積2や、東側からの土圧を二重に吸収するような石積3と石積4もみられます。さらに石積2は土留めの機能とともに、三門の基壇かつ三門石階段を支える機能をあわせもつものと考えられます。そのほか、石積1と石積2の間には土砂を入れずに石灰岩礫を投入しています。これは石積2の裏込め石としての機能に加え、大雨などで境内が冠水しないよう放生池側への排水を意識したものと考えられます。



石積1(トレンチ11内・北西から)



土留め石積み検出状況（北から）



石積2西面（北から）



石積1（南から）



石積1・2西面（西から）

その他の遺構

三門地区の発掘調査では、多くの瓦片がまとまった状態で2基検出されました。三門は瓦葺きであったことから、これらは瓦の葺き替えの際に廃棄されたものや戦災によるものと考えられます。一緒に出土した遺物から、1基は戦後、もう1基は19世紀以降に廃棄されたものと考えられます。なお、三門の改修に関する記録はいずれも近世期のもので、今回検出された瓦片の廃棄時期と異なります。このことから、記録に残らない三門の改修がなされていた可能性も考えられます。



瓦だまり検出状況（東から）



瓦だまり検出状況（トレンチ 31 内・東から）

円覚寺の基礎工事

円覚寺一帯は、首里城が立地する丘陵（南側）と、現在の沖縄県立芸術大学図書館側（北側）に高まりを持つ凹地であったことが地山面の検出状況などから推測され、さらに不透水層であるクチャを基盤とする性質上、当地は水はけの悪い土地であったことが考えられます。このような場所に円覚寺を造営するにあたり、大量の土砂でもって土地を造成するとともに放生池側への排水、さらに土圧の軽減といった様々な工夫を行っていたことが発掘調査によって明らかとなりました。

かつて地上にあった円覚寺の建造物群は、学術的な価値の高さも評価され、旧国宝（建造物）にも指定されていました。一方で、地中にも目を向けると、利活用するには不便であったと考えられる土地を利用可能にした、たくましい造成の技術がしっかりと残されていました。そして三門は1492年に創建されて以降、文献により数回の改修を受けるとされますが、基壇の遺構が重複する状況などはみられないため、基壇自体の位置は大きく変わることなく、沖縄戦直前まで存在していたことがうかがえます。

(3) 出土遺物について

円覚寺跡の発掘調査によって出土した遺物は、中国・タイ・日本・沖縄産の陶磁器をはじめ、土器、石製品、骨製品、貝製品、木製品、漆製品、円盤状製品、玉類、金属製品、鉄製品、煙管、銭貨、瓦、ガラス製品、脊椎動物遺体、貝類遺体などがあり、年代的には15世紀～20世紀代のものが得られています。これらの多くは攪乱層から出土したのですが、造成土からの出土遺物も一定量あります。

主な特徴として、瓦や埴などの建築部材が多いことや、香炉など、祭祀や寺院遺跡を特徴づける多種多様な遺物が出土していることが挙げられます。中でも注目される遺物の一つに、インドネシアなどで祭祀や儀式に使用される「クリス」と呼ばれる蛇行状の鉄製の短剣があります。日本国内でもクリスの出土例は稀であり、なぜ円覚寺跡から出土したのかは謎ですが、琉球と東南アジア諸国との交流によって運ばれてきたのかもしれない。

その他の遺物として、三門北側の攪乱層から漆が塗布された木材片が出土しています。この木材片の樹種同定を行った結果、イスマキ属と判明しており、建築材の推定に役立てられています。

現在、三門の復元事業が着々と進められていますが、これらの遺物は、三門の復元に関する基礎資料であり、当時の寺院内での生活や祭祀の状況を示す資料となります。



南側石牆地区の出土遺物



左：漆が施された陶質土器（壺） 中：初期沖縄産無釉陶器（香炉） 右：初期沖縄産無釉陶器（壺）



飾り金具（蝶番）



飾り金具（木材残存）



礎盤（輝緑岩製）



クリス（蛇行剣）

3 円覚寺跡の整備

(1) 戦災文化財の復元整備

戦前の沖縄には、数多くの旧国宝が存在しました。沖縄における最初の指定は、1907（明治40）年5月27日に古社寺保存法（1897〔明治30〕年6月10日公布から1929〔昭和4〕年7月1日廃止）により「国宝ノ資格アルモノ」に定められた「銅鐘（顕徳三年ノ銘アリ）」です。

その後、1933（昭和8）年1月23日に国宝保存法（1929〔昭和4〕年～1950〔昭和25〕年8月29日）による尚家霊廟（円覚寺伽藍）にあった仏殿や三門附左右廊、鐘楼、方丈（龍淵殿）、開山堂（獅子窟）、総門や放生橋、左掖門と右掖門などの建造物群が旧国宝に指定されましたが、1945（昭和20）年の沖縄戦によって全ての建造物群が焼失しました。

それ以外にも、1925（大正14）年4月24日に旧国宝に指定された沖縄神社拝殿（首里城正殿）や1933（昭和8）年1月23日に国宝保存法による旧国宝に指定された首里城守礼門、首里城歓会門、首里城瑞泉門、首里城白銀門、園比屋武御嶽石門、尚家霊廟（崇元寺）、1936（昭和11）年9月18日に指定された末吉神社社殿、1938（昭和13）年7月4日に指定された沖宮本殿、1938（昭和13）年8月26日に指定された弁嶽（冤嶽）石門などがありましたが、これらも戦災によって破壊・焼失しました。

戦後の円覚寺は、1948（昭和23）年に琉球列島米軍政府によって設立・開学した琉球大学の教員官舎が建てられ、多くの遺構が破壊もしくは地下に埋蔵されました。その後、かつて仏殿や龍淵殿などといった木造建造物群が建てられていた場所は、1965（昭和40）年頃に琉球大学のグラウンドとして造成が行われました。

このような状況から文化財の荒廃を抑止するため、琉球政府が諮問機関である文化財保護調査会を設置し、1954（昭和29）年6月29日には日本の文化財保護法に準拠した文化財保護法（立法第7号）が制定交付されます。そして琉球政府文教局の外局として、琉球政府文化財保護委員会が発足（1954〔昭和29〕年4月1日）し、



総門の復元工事の様子

文化財の指定や整備、調査などが行われました。

戦災文化財の復元整備は、首里城周辺に残されていた旧国宝など多くの建造物から着手されました。復元整備は崇元寺石門の修復（昭和26年）に始まり、園比屋武御嶽石門の復元（昭和32年）や首里城守礼門の復元（昭和32年）、円覚寺総門の復元（昭和42年）、放生池・放生橋の修理（昭和43年）、弁財天堂の復元（昭和43年）、天女橋の修理（昭和43年）、首里城城郭等の復元整備（昭和47年）が実施されました。

1984（昭和59）年には、琉球大学キャンパスが首里城跡及びその周辺から現在の西原町字千原キャンパスへの移転完了に伴って、円覚寺跡は県営公園内に位置付けられ、首里城を軸とした復元整備事業に付随するかたちで整備が本格的に始動しました。

(2) 円覚寺跡保存整備事業 (文化庁国庫補助事業等)

円覚寺跡の復元整備に必要な基礎資料を得るために、1997（平成9）年度から2001（平成13）年度までに文化庁の補助を受けて、遺構確認調査を実施した結果、良好な状態で石牆（石垣）や基壇等の遺構が検出されました。

2002（平成14）年度から文化庁の補助を受けて、史跡円覚寺跡の石牆の整備がスタートしました。円覚寺跡は、県営首里城公園の範囲に含まれており、隣接する首里城跡や円鑑池、龍潭等の史跡の整備及び公園整備事業（国、県土木建築部）との整合性を図り、その保全と活用・公開等を図ることが必要になりました。

その成果や聞き取り調査及び文献資料等を基に、石牆の保存整備を実施し、2002（平成14）年度から2011（平成23）年度までに石牆の総延長約170 mのうち145 mを整備しました。2012（平成24）年度以降も引き続き石牆の整備事業を実施し、2012・2013（平成24・25）年度で17.5 mの整備を実施しました。

沖縄戦で焼失した円覚寺の9件の建造物の詳細な平面図を記した図面が、戦前・戦後にかけて守礼門の修理や復元などに尽力した元文部省技官の森政三氏が残した資料に含まれていることが、2013（平成25）年までに確認されており、これらの図面は2014・2015（平成26・27）年度に沖縄県教育委員会が行った三門復元の基本設計に反映させました。続いて2016（平成28）年度は三門周辺の測量を実施し、2016（平成28）年度末から2019（令和元）年度まで三門の復元工事に伴う実施設計を行いました。2020（令和2）年度は、これまでの整備委員会で検討した遺構の保護や石階段の設置を行いました。2021（令和3）年度は木造の三門復元工事に着手し、基礎部分の工事を実施しました。2022（令和4）年度は、三門の32個所の一階部分の斗棋の作製と木材の調達を実施しました。2023（令和5）年度は、三門の22個所の二階部分の斗棋の作製並びに、木鼻、実肘木の彫刻を行いました。

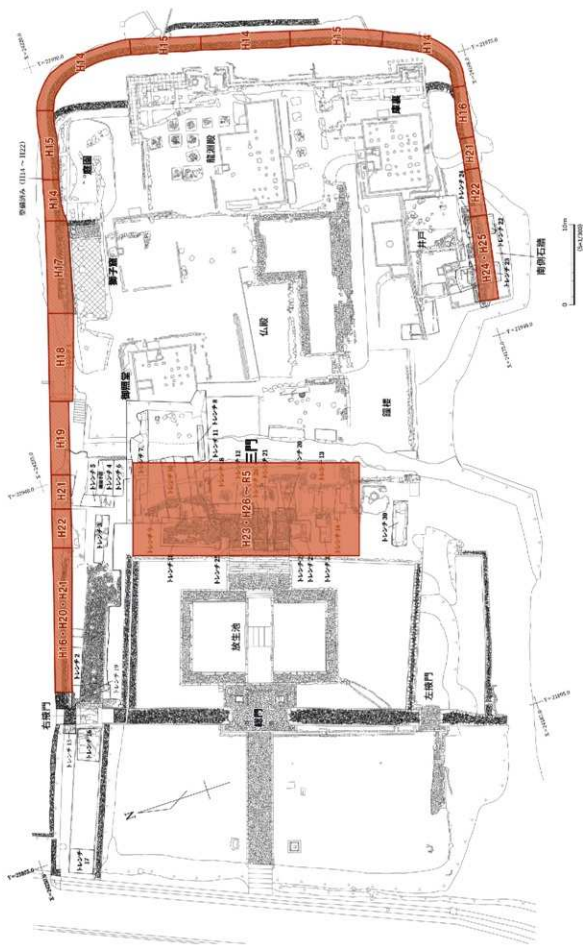


円覚寺跡保存整備の推移

年度	事業内容等
平成14年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・97.1㎡） ・工事用道路の設置
平成15年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・48.1㎡）
平成16年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・28.1㎡） ・工事用道路の設置、既存石積みの解体
平成17年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・43.0㎡）
平成18年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・42.0㎡）
平成19年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・30.0㎡）
平成20年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・29.4㎡）
平成21年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・27.0㎡）
平成22年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・44.5㎡）
平成23年度	・三門地区地耐力調査
平成24年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・17.5㎡）
平成25年度	・修復工事（石牆〔土留めの石積み〕・・・平成24年度同じ箇所と同じ距離）
平成26年度	・三門復元基本設計（県費）
平成27年度	・三門復元基本設計（県費）
平成28年度	・三門復元実施設計（着手）
平成29年度	・三門復元実施設計、遺構保護に伴う盛土造成
平成30年度	・三門復元実施設計、ボーリング調査
令和元年度	・三門復元実施設計（完了）、琉球政府設置標柱撤去
令和2年度	・石階段修復工、遺構保護工（三門・境内）
令和3年度	・コンクリート基礎工、石材及び木材購入等
令和4年度	・三門一階の斗拱の加工、木材購入等
令和5年度	・三門二階の斗拱の加工



三門基礎コンクリート基礎工事実施後（令和3年度）



円覚寺跡 年度別 保存整備事業実施箇所



3 円覚寺跡の整備

斗拱 関連部材の製作状況



鉋掛け (卷斗)



鉋掛け (肘木)



鉋掛け (木鼻)



鑿入れ (木鼻)



彫刻 (実肘木)



斗拱仮組み

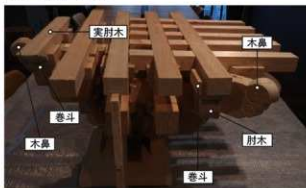
円覚寺跡

3 円覚寺跡の整備

(参考資料) 斗拱の各部名称



斗拱検討模型写真 (縮尺: 1/2) 正面



斗拱検討模型写真 (縮尺: 1/2) 側面

(3) 円覚寺三門の復元の経緯

沖縄戦前の首里には、古社寺保存法や国宝保存法の指定による旧国宝や多くの文化財が存在していました。しかしながら、1945（昭和20）年の沖縄戦で多くの人命と貴重な文化財が失われました。沖縄戦がなければ、首里には京都や奈良等と同じように首里城を中心とした琉球国の歴史を感じる景観や文化財等が残っており、本土と異なる歴史や文化を体感することができる、沖縄県民にとって誇り高き場所であったことでしょう。

沖縄県教育委員会では、戦災文化財の復元整備事業の一環として、2002（平成14）年度から円覚寺跡の境内の石牆について復元整備を実施しています。沖縄が本土への復帰と同時に、18件の遺跡が国の史跡に指定されましたが、その中で、仏教寺院の遺跡は円覚寺跡のみでした。

首里城周辺の整備が図られる中で、琉球最大の寺院の楼門である三門を復元整備することは、既に復元された総門や放生池・放生橋などとともに、往時の状態に再現する意義は高いと考えます。加えて、三門の復元は建造物などの整備にとどまらず、琉球国の首都であった首里の往時の景観を回復する意味でも重要です。また、復元により具体化した空間を通じて琉球国時代の歴史や文化を知ることが、沖縄県民のアイデンティティーを高めるとともに、史跡の公開・活用を行う上でも重要なことです。

円覚寺三門について

往時の円覚寺の寺域は1080坪ほどあり、ほぼ西に面していました。周囲は石牆で囲まれ、総門から奥にある龍淵殿へ向かって全体に上り勾配になっていました。

放生橋を渡ると13段の石階段があり、14段目が三門の基壇となっていました。戦前の円覚寺を写した古写真では、門全体が禅宗様式の「三間一戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺」の造りになっており、放生橋から見上げる三門は、円覚寺の楼門として重厚で威厳あふれる姿をみせています。日本建築史の創始者である伊東忠太は、円覚寺を調査して次のように記しています。「必ずしも大規模ではないが、琉球における唯一の七堂伽藍群の巨刹で、同時にまた美しい建築物である」。日本本土の寺院配置と比べると、塔がないことが最大の特徴となっています。

※概要

三門は三解脱門（空・無相・無願）を象徴するといわれ、諸々の執着を取り払って仏眼（涅槃・解脱）に至る門とされる。

建 立：明応3年（尚真18年：1494年）

修 復：天正16年（尚永8年：1588年）

慶安1年（尚質5年：1652年）

元禄10年（尚貞29年：1697年）

構造形式：三間一戸二階二重門（桁行三間、梁間二間）、入母屋造、本瓦葺

附 左右門廊 各桁行三間、梁間一間、切妻造、本瓦葺

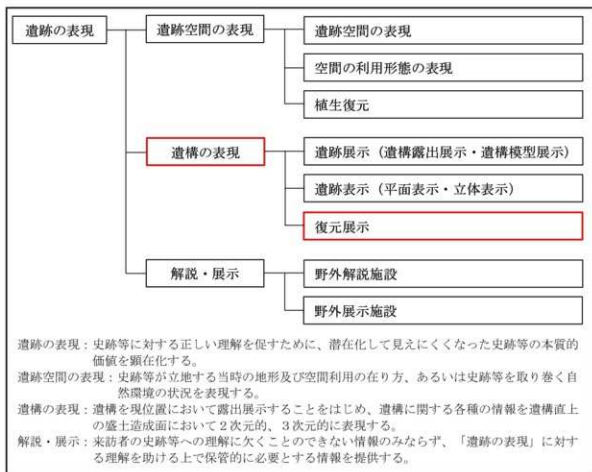
建築様式：禅宗様式

遺物の復元年代について

発掘調査の成果によると、残存する遺構の大部分が1728（享保13）年の上・下御照堂改修時以降（上御照堂・下御照堂を小堂に改修、獅子窟と御照堂とする）のものとなりました。また、戦前の古写真をはじめとする他の関連する資料も戦前の昭和初期のものが殆どであるため、三門を含む建造物の復元年代は、18世紀前半（享保13・高敬16：1728年）から沖繩戦（1945：昭和20年）で焼失するまでの年代を設定しています。

遺構の取扱いについて

復帰前に復元された総門は当時の礎石を利用して上に整備が行われていますが、三門に関しては地下遺構の保存を基本とした復元整備をしています。そのため基壇等の遺構の保護と復元する三門の安全を図るため、盛土造成を行う検討をしました。検討の結果、遺構の保護や景観に配慮した必要最小限の高上げを行う地盤高とすることとなりました。三門の復元においては41cmの盛土による嵩上げを実施しています。



遺跡の表現に関する技術の体系



円覚寺 三門

(鎌倉芳太郎撮影：沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)



円覚寺跡 三門跡の現況 (2016 (平成 28) 年時点)

左は戦前まで残っていた三門の写真です。この三門を現代に甦らせるべく、2014 (平成 26) 年度からスタートしたの復元整備ですが、10 年を迎えた今年度は、三門の一階木材の組み上げを行います。以後、数年をかけて三門が復元される予定です。

首里城跡の正殿は 2026 (令和 8) 年度完成を目指していますが、傍らでは円覚寺跡でも三門の復元を着々と進めており、皆さまの前にその姿を現す日はそう遠くはないでしょう。



塗装彩色がある円覚寺三門のイメージバース

引用・参考文献

- ・鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』(写真)岩波書店
- ・沖縄県教育委員会監修 1984『1961年 沖縄文化財調査報告』「旧国宝の由緒と構造形成」
- ・沖縄県教育委員会 1984『文化行政要覧 一昭和 58 年度版一』
- ・首里城復元期成会 1993『甦る首里城 歴史と復元』
- ・沖縄県教育委員会 1994『文化行政要覧 一平成 5 年度版一』
- ・沖縄県教育委員会 1998『文化行政要覧 一平成 10 年度版一』
- ・沖縄県教育委員会 2000『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』平成 11 年度沖縄県史料調査シリーズ第 2 集 沖縄県文化財調査報告書 第 140 集 沖縄県教育委員会
- ・那覇市教育委員会 2000『那覇市教育史 資料編』
- ・沖縄県教育委員会 2002『史跡円覚寺跡保存活用計画』沖縄県教育委員会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡一遺構確認調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 10 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・沖縄県教育庁 2004『円覚寺跡基本整備実施計画書』沖縄県教育庁
- ・那覇市教育委員会 2004『史跡玉陵整備事業報告書』
- ・知名定寛 2008『琉球孤叢書』琉球仏教史の研究 榕樹書林
- ・首里城復元期成会 2009『甦る首里城 首里城復元期成会三十五年の歩み』
- ・那覇市歴史博物館 2012『那覇の神社・寺院～先祖が拜んだ神・仏～』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)一右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『円覚寺跡(3)一三門地区の遺構確認調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

円覚寺・首里城関連年表

時代区分	西暦	日本元号	中国元号	王統	事項
三山時代	1265年	文永2	至元2	6	僧禅鑑、浦添に極楽寺を建立する。
	1350年	正平5	至正10	察度1	察度王即位(浦添按司から王となり首里へ)。
	1372年	文中1	5	23	明の太祖、楊載を遣わし招諭、中山王察度、明へ進貢。
	1384年	至徳3	洪武17	35	僧頼重法印が入滅する。
	1392年	明德3	25	43	中山王察度、高世麗理を建造・遊観。中国閩人三十六姓来琉と伝わる。
	1404年	応永11	永楽2	武寧9	明国皇帝の冊封使はじめて来琉。シヤム(タイ王国)船渡来し交易。
	1406年	13	4	尚思紹1	尚巴志、中山王武寧を滅ぼす。第一尚氏王統始まる。この頃、首里城瑞泉門(1406～1469年)を創建。
	1416年	23	14	11	尚巴志、北山王攀安知を滅ぼす。
	1422年	29	20	尚巴志1	尚巴志即位。この頃、美福門(1422年～1439年)創建。
	1427年	34	宣徳2	尚巴志6	龍潭を掘り安国山を築く、安国山樹草木之記碑建立。
1428年	正長1	3	7	建国門(中山門)を創建。	
1429年	永享1	4	8	中山王尚巴志、南山王他魯每を滅ぼし三山を統一。	
第一尚氏王朝時代	1430年	2	5	9	この頃、首里城美福門(1422～1439年)を創建。中山王、明に三山統一を告げ勅語賜う。明の使者を琉球に遣わし、中山王に尚姓を賜う。
	1451年	宝徳3	景泰2	尚金福2	国相権機、長虹堤を築く、長寿寺を建立する。
	1453年	享徳2	景泰4	尚金福4	王位継承争い「志魯・布里の乱」起こる。首里城焼失。
	1454年	3	5	尚泰久1	琉球銭貨「大世通寶」を初めて鋳造。尚泰久即位の1454年～56年の間に板葺き屋根の首里城正殿を再建。
	1454年	3	5	尚泰久1	景泰年間「芥隠」を起し、天龍寺と普門寺を建立する。
	1456年	康生2	7	3	万寿寺鐘を鋳る。
	1458年	長祿2	天順2	5	護佐丸・阿麻和利の乱。「万国津梁の鐘」を首里城正殿にかけらる。
	1459年	3	3	6	王府倉庫(京の内倉庫跡)を失火で消失する『明實録』。
	1459年	3	3	6	臨海寺に鐘をかける。
	1461年	寛正2	5	尚徳1	琉球銭貨「世高通寶」を初めて鋳造。
ス ク	1466年	文正1	成化2	6	天室殿を天界寺に建て、神徳寺が建立される。
	1467年	1	成化1	尚徳7	尚徳王が朝鮮国王に鸚鵡、孔雀を進呈し、朝鮮国王李瑄から方冊藏経、漢籍、朝鮮鐘(波上宮所藏)が送られる。
	1469年	文明1	成化5	9	首里城で反乱が起こり、第一尚氏王統滅びる。
	1470年	2	6	尚円1	金丸、王位に就き尚円と号し、第二尚氏王統始まる。琉球銭貨「金圓通寶」を初めて鋳造。
	1476年	8	12	7	尚円王代に天王寺・龍福寺が建立される。
	1477年	9	13	尚宣威1	尚宣威王位に就くが、尚真に位を譲る。
				尚真1	この頃(1477～1526年)歓会門、久慶門、白銀門建立。
	1492年	明応1	弘治5	尚真16	円覚寺創建。仏殿、荒神堂、寢室、方丈、仏殿、法堂、山門、両廊、僧坊、厨庫、浴室が創建当初の建物。「広範囲に地ならしを行い、瓦を遣って堂宇に葺いた」とされる。(『球陽』、『琉球国由来記』ほか)
	1494年	明応3	弘治7	18	円覚寺建立(1494年竣工)。 寺域1,080坪(3,564㎡)余 大殿(方丈)の右側に御照堂(当初のもの、東御照堂)が建立され、宗廟となる。
	1495年	4	8	19	住持の芥隠が没する。前鐘、中鐘鋳造。
1496年	5	9	20	鐘楼築造、楼鐘鋳造。(『球陽』)	
1497年	6	10	21	円覚禪寺記碑撰文撰文。(碑文より)	
1498年	7	11	22	放生池、放生橋築造。(『球陽』)	
1501年	文龜1	14	25	王家の陵墓、玉陵を築く。この頃(1506～1521年)北殿が創建。	
1502年	2	15	26	円覚寺前に圓鑑池を造り、弁財天堂を建立し、朝鮮王から贈られた方冊藏経を納める。	
1506年	永正3	正徳1	30	久米島、具志川按司を征討。正徳年間に首里城北殿が創建。	
1508年	5	3	32	首里城正殿に石造欄干造営(中国的様式)、一対の大龍柱(中国産貴石:輝綠岩)を設置。	
1519年	16	14	43	圓比屋武御嶽石門・弁ヶ嶽の石門創建。	
1519年	16	14	43	木彫円覚寺白象を彫像。	
1522年	2	嘉靖1	46	真珠道起点の石門東側に国王頌徳碑、西側に真珠湊碑を建立。この頃(1527～1555年)、龍徳、首里門(のちの守礼門)を創建。	
1546年	15	25	20	首里城東南側城壁工事完成し、城壁が二重となる。羅世門を築き、添継御門之北の碑文・同南の碑文を建立。	

時代区分	西暦	日本元号	中国元号	王 統	事 項
平安時代 前期	1571年	元龜2	35	16	御照堂を加建。(『球陽』)
	1588年	16	16	16	方丈、大殿、三門を修復。両御照堂が瓦葺となる。
	1596年	慶長1	24	尚寧7	法堂(仏殿?)修復。
	1604年	9	32	16	袋中上人来瑠し、浄土宗を伝える。
	1609年	14	37	21	薩摩軍(兵3000)侵攻し、尚寧王薩摩へ連行(～1611年帰国)。
	1616年	元和2	44	28	薩摩より朝鮮陶工一六、一官、三官来瑠し、陶法を伝授(一六は帰化し、湧田村で作陶)。 この頃、首里城南殿(1621～1627年)創建。
	1621年	元和7	天啓1	尚豊1	住持恩叔に命じて方冊藏経堂跡地に堂宇を建立させ、円覚寺方丈内にあった弁財天女像を移して安置し弁財天堂と称する。
	1652年	慶安1	9	尚賢5	円覚寺の三門を修復。
	1660年	万治3	順治17	13	首里城、火災で炎上し正殿その他が全焼する。
	1670年	10	康熙9	尚貞2	首里城正殿再建工事により瓦葺きに改める。
	1672年	12	11	4	円覚寺の知行高が60石まで落とされる。
	1687年	貞享4	26	19	石峯が芥隠像をつくり円覚寺に奉安する。
	1693年	元禄6	32	25	木彫円覚寺白象が修理される。
	1695年	8	34	27	円覚寺の知行高が100石に戻される。
	1696年	9	35	28	円覚寺三門に観音・十六羅漢像が奉納される。
1697年	10	36	29	円覚寺仏殿に金剛会と善華師師の画軸をかける。楼閣毀損のため再葺。三門を修復。	
1709年	宝永6	48	41	首里城正殿・北殿・南殿焼失。1715年までに再建。	
1712年	正徳2	51	尚益3	首里城再建が本格化し、1715年に完了する。	
1715年	5	54	尚歌3	寺社奉行、はじめて宗廟の祭典を司ることを定める。	
1717年	享保2	56	5	住持の竜翁が境内に花木を植え、より壮大となる。	
1721年	6	60	9	大殿(龍淵殿)焼失、同年再建。(『球陽』) 住持の竜翁は八重山に流罪となり、徳叟が住持を再々任する。	
1722年	7	61	10	井戸の西側に行堂を創建。	
1722年	7	61	10	上御照堂、下御照堂及びに大殿(龍淵殿)に国王の各位牌を祀る。 また、衆人・庶民の円覚寺の拝謁を許可する。	
1728年	13	雍正6	16	獅子窟、御照堂を小堂に改築。	
1734年	19	12	22	天王寺を改修し、大殿を王妃廟とする。	
1744年	延享1	9	32	鐘樓、亭寮、照堂寮の移築、修復。(『球陽』)	
1795年	寛政7	60	尚温1	天女橋が傾きそうになったので改修を行う。(重修天女橋碑記) 円覚寺に歴代王の画像を安置する。	
1862年	文久2	同治1	16	崇元寺正殿を改修する。	
1869年	明治2	8	22	弁財天堂消失。	
1872年	5	11	25	琉球藩設置。政府、太陽暦の使用、24時間制の採用を命ずる。	
1879年	12	5	32	高泰王、首里城明け渡し(廃藩置県)、450年に及ぶ琉球王国崩壊。熊本鎮台沖繩分遣隊首里城駐留、琉球処分。沖繩県設置、鍋島直彬が着任。	
1884年	17	光緒10	明治17	尚家の私寺に移管。	
明治時代 前期	1933年	昭和8	22	昭和8	総門、右掖門、左掖門、放生橋、三門、仏殿、鐘樓、獅子窟、龍淵殿が旧国指定。
	1945年	20	34	20	円覚寺、首里城とともに沖縄戦で焼失・崩壊。
	1948年	23	37	23	円覚寺跡に琉球大学官舎建設。
	1955年	30	44	30	円覚寺跡が琉球政府指定史跡に。
	1956年	31	45		放生池石橋勾欄、木像白象及び礎意書木札が琉球政府特別重要文化財に指定。
	1957年	32	46	32	圓比屋武御殿石門を復元する。
	1958年	33	47	33	守礼門を復元する。
	1965年	40	54	40	円覚寺跡に琉球大学グラウンド建設。
	1967年	42	56	42	首里城跡を含む戦災文化財の復元整備計画立案。
	1968年	43			琉球政府文化財保護委員会により、総門、右・左掖門、放生池が復元される。
	1972年	47	61	47	沖繩本土復帰(沖繩県設置)、首里城欽会門復元整備着手(～2001年度までに外郭石積みと各門が完成)。首里城跡が国指定史跡となる。
	1972年	47	61	47	円覚寺跡が国指定史跡に、放生池が国指定重要文化財に指定。総門が県指定有形文化財に指定。
	1982年	57	71	57	首里城跡より琉球大学西原町へ移転。
	1995年	平成7	84	平成7	円覚寺総門の保存修理工事が完了される。
	1997年	9	86	9	沖繩県立埋蔵文化財センターにより円覚寺跡発掘調査開始(1997～2001、2006～2010、2012～2013、2016)。
2000年	12	89	12	沖繩サミット開催。首里城跡、圓比屋武御殿石門を含む9資産(玉陵、今帰仁城跡、座喜味城跡、勝連城跡、中城城跡、識名園、斎場御嶽)がユネスコの世界遺産に登録。首里城系図座・用物庫復元竣工。	
2002年	14	91	14	円覚寺跡保存修理工事(石橋)が開始される。	
2003年	15	92	15	円覚寺関係木彫資料35点が県指定有形文化財に指定。	



ギャラリートーク・関連講座のおしらせ

受講料無料

ギャラリートーク

場所：企画展示室

当センターの企画展示室にて、「企画展 史跡 円覚寺跡－発掘調査と整備－」を専門員が解説します。

関連講座

場所：研修室

「(仮)発掘された円覚寺跡」
「円覚寺三門等の復元について」

講師

上地 博、金城 貴子(当センター専門員)

10/27日

関連講座 13:15～16:10 (受付13:00)
ギャラリートーク 16:15～16:45

11/10日

ギャラリートーク ①10:00～10:50
②14:00～14:50

沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日 月曜日(国民の休日・慰霊の日にあたる場合は翌平日に振替)
国民の休日(こどもの日・文化の日を除く)
年末年始(12/28-1/4)
慰霊の日(6/23) ※その他臨時休所あり

開所時間 9:00-17:00(入所は16:30まで)

住所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

電話番号 ☎098-835-8752/8751

WEBサイト [沖縄県立埋蔵文化財センター](http://www.okinawa-archaeology.com/)

